

小暮智一氏ロングインタビュー

第1回：少年時代～高校時代



高橋

高橋 慶太郎

〈熊本大学大学院先端科学研究部 〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪 2-39-1〉

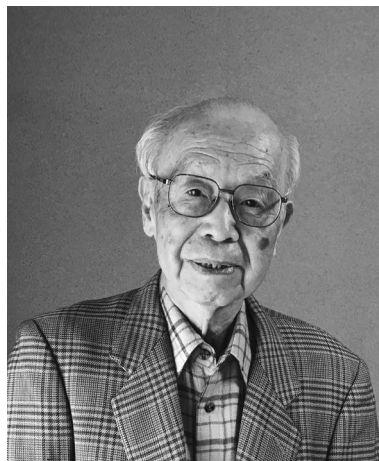
e-mail: keitaro@kumamoto-u.ac.jp

インタビュー協力：浅井 歩（京都大学），編集協力：高橋美和

今月より、京都大学名誉教授である小暮智一氏のインタビューを連載いたします。小暮氏は京都大学宇宙物理学教室で宮本正太郎の指導を受け、輝線星の研究に取り組みます。理論的な研究を進めるとともに、当時完成したばかりの岡山天体物理学観測所188 cm望遠鏡のヘビーユーザーでもありました。また、小暮氏は1980年代に光学天文連絡会の委員長を長く務め、日本で初めて作る大型光学望遠鏡（すばる）の計画を検討する上でコミュニティを牽引したり、日本天文学会の理事長を務めたりするなど、天文学に多大な貢献をしました。今回は少年時代から高校時代のお話です。

小暮智一氏略歴

- 1926 群馬県桐生市生まれ
- 1950 京都大学理学部 卒業
- 1961 京都大学理学部 助手
- 1969 茨城大学理学部 助教授
- 1969 茨城大学理学部 教授
- 1976 京都大学理学部 教授
- 1982 光学天文連絡会 委員長（～1990）
- 1989 日本天文学会 理事長（～1991）
- 1990 京都大学 退官
- 1993 美星天文台 台長
- 2000 美星天文台 退職



小暮智一氏近影

●本好きな少年

高橋：インタビューをお引き受けいただきどうもありがとうございます。まずは、お生まれから聞いてもいいですか？

小暮：大正15年6月10日に群馬県桐生市で生まれました。

高橋：大正15年というと、12月から昭和元年ですね。小学校も桐生市ですか？

小暮：小学校は桐生市の昭和尋常高等小学校。あの頃は尋常科ってのは6年で、だいたい中学に行くんです。中学に行かない人は高等科に行くの。高等科ってのは就職のための準備期間だったんですよ。

高橋：先生はその尋常科に6年間いて。

小暮：そうです。小学校にあがったら、先生から

叱られてばかりいたなあ。

高橋: わんぱくなお子さんだったんですか？

小暮: そう。それからいつの間にか、おとなしくなっちゃったんだよね(笑)。

高橋: 小学校の教育はどういうものだったんですか？

小暮: 私が入った昭和8年ってのはね、教科書が変わったんです。国定教科書。私の年から軍国主義的な教科書に変わった。国語の教科書は最初がね、「さいたさいた、さくらがさいた」でしょ。2番目がね、「すすすすめ、へいたいすすめ」って。それからね、修身っていう教科書があるでしょ。その頃日清戦争でね、「木口小平という兵隊は死んでもラッパを放しませんでした」とか、それから爆弾三勇士とかいって、「上海の戦争で3人の兵士が大きな爆弾を抱えて鉄条網を突破するために自ら犠牲になった」とかね。そういう話ばかり出てくるんです、修身には。そういうのが始まった時代。

高橋: そういう教育を受けると、やっぱりそういう気持ちになるんですか？

小暮: それはなりますね。お国のために死んでもいいってね。他の人もなったんじゃないですかね。

高橋: 小学生のときに日中戦争が始まったんですね。

小暮: 小学5年生の時に盧溝橋事件が起こった。その頃は日本軍が勝ったっていったし、兵隊さんにご苦労ご苦労ってんでね、そういう慰問活動をやってた。それから高崎連隊っていうのがあってね、例えば秋の大演習やるでしょ、そうすると兵隊が民家に分宿するんです。そうすると我が家でもね、兵隊を1人か2人受け入れるんですよ。で、兵隊さんからいろんな話を聞く。それが目的なんです。兵隊さんにいろんな話を聞いて、元気づけられて、そういうことは何回かありましたね。

高橋: じゃあ、兵隊に入ろうという気持ちは？

小暮: ないですね。

高橋: そうですか。子供心にも戦争はひどいもの

だなあという感じはあったんですか？

小暮: 小学生の時はあんまりそういうのなかった。中学になってからはどうも戦争ってのはよくないんじゃないかなって気持ちはあったけど、それは口に絶対出せない。

高橋: 小学校では勉強の方はいかがでしたか？

小暮: 1年生に上がった時ね、同級の女の子がいたの。1年生2年生は男女共学だったから。その女の子が1番なんですよ。しゃくでねえ、頑張るんだけどなかなか1番になれなかった。

浅井: じゃあ小暮先生は2番だったんですか？

小暮: 2番だった(笑)。その女の子にそういつたのを感じて(笑)、ライバルだったんですよ。

高橋: 3年生からは男女分かれてということですか？

小暮: そうです。だけどやっぱり1番にはなれなかった。たいてい2番か3番で6年間過ごした。だいたい私が小学生の時はね、成績があんまり良くなかった。私の妹たちや弟はね、成績いいんですよ。あの頃の成績ってのは、甲・乙・丙・丁っていうんですよ。良いと甲でしょ、乙・丙まではいいんだけど、丁だと落第。それで、妹や弟はみんな甲なんですよ。私は必ず乙がある。体操でしょ、音楽でしょ、図画(笑)。勉強は普通なんだけど、3つ乙があるからね。弟には頭があがらないの(笑)。

高橋: 勉強は全部甲で、体操や図画があんまり好きじゃなかったと。

小暮: 好きじゃない。やっぱり1番になる人はそういうところもみんな成績がいいわけ。偉いなあと思ってたけど。でも5年生から担任の先生がまあ認めてくれてね、体操は調子が悪いけど甲にしてやるっていうんでね、5・6年は全甲だったんですよ。

浅井: 全甲ってすごいですね。

小暮: 全甲ってのはいい生徒っていう代名詞だったの。やっとな全甲になってね。

高橋: 勉強のことで印象に残っていることはあり

ますか？

小暮：国語の教科書にどっかの町の紹介があったりするんですよ。例えば大阪って街がある。そうすると担任の先生がね、「教科書の中になんぼでも注を自分で書き入れろ」という。

高橋：自分で調べて。

小暮：はい、それで私の教科書は書き込みで真っ黒になっちゃった。そしたら卒業するときに担任の先生が記念にくれて言うんですよ（笑）。

高橋：そんな一生懸命やった生徒はいなかったわけですね。

小暮：どのページを見ても、いっぱい書き込みがあっただけね。

高橋：お父様はどういったお仕事をされてたんですか？

小暮：田舎の医者、開業医。

高橋：お医者さんですか、じゃあやっぱり教育には力を入れて？

小暮：うちには子供が9人いたんですよ。だから子供9人に教育を受けさせようとしたわけ。すると1人前の割合がそんなに良くないわけよ。

高橋：ご兄弟が9人もおられると、結構年が離れてたんですか？

小暮：一番上が明治45年生まれ。一番下が昭和7年生まれですからね。だから姉の産んだ子供と、一番下の弟が同じ年。

高橋：どういう遊びをしてたんですか？

小暮：友達の家裏がすぐ山なんです。で、山を走り回って秘密の小屋を作った。海賊物語だったりね、わんぱくしてたな。わりとわんぱくだったですね。

高橋：本を読んだりはされてたんですか？

小暮：小学校5・6年生の頃かなあ、原田三夫っていう作家がいてね。その頃の人気作家ですよ。その人の宇宙の話とか宇宙旅行の話とか、何冊かあったと思うんだけど、そういう本を一生懸命読んでたけど。だけど将来天文やろうなんて気は全然なかった。

高橋：では楽しい読み物として。

小暮：ええ。あとね、「子供の科学」という雑誌、今でも続いていますね。その頃からありましたよ。で、「子供の科学」に結構ね、天文の記事があったんだ。他にもいろんなサイエンスの紹介があった。だから「子供の科学」は私の愛読書でした。

高橋：先生の世代の方にお話を聞くと、「子供の科学」を読んでたという方が結構いらっしゃいますね。

小暮：そうでしょう。非常にポピュラーだったですね。もう一つの愛読書はね、講談社の「少年倶楽部」。

高橋：それはどういった雑誌なんですか？

小暮：まあ一般的な読み物です。そこで一生懸命読んでたのはね、南洋一郎っていう作家の連載だね。冒険談なんです。それから20面相とか明智小五郎の出てる江戸川乱歩の連載があってそれが面白くてね。

高橋：「少年探偵団」ですね。

小暮：はい。それと「のらくろ」って漫画があっただけね。そういうのが面白くて愛読してました。

高橋：ではよく雑誌をお読みになっていたんですね。

小暮：ええ、本読むの大好き。

高橋：お父様がお医者さんということで、家に本がたくさんあったりしたんですか？

小暮：明治大正文学全集とかね、そういう小説が多かった。小学生の時からね、ひそかに恋愛ものあたりを読み漁ったりしてましたよ（笑）。菊池寛なんてご存知でしょう。大人の小説ですよ。あれを子供のころからね（笑）。

高橋：じゃあ結構ませたお子さんで。

小暮：人が来ると、慌ててふせて（笑）。

●中学で軍事教練が始まる

高橋：中学はどちらですか？

小暮：群馬県立桐生中学校に昭和14年入学。

高橋: 中学は義務教育ではなくて、受験があるわけですよね。受験しようというのは自分で思われたんですか？

小暮: ええ、中学へ入りたいと。

高橋: 小学校の5・6年では全甲で優秀だったということで、受験はそんなに難しくはなかったんですか？

小暮: そうですね、まあ入れるかなあと思うくらい。

高橋: 競争は激しかったんですか？

小暮: 2倍くらいじゃなかったかな。そのとき日中戦争の頃でね、試験の発表の日に戦死した兵士の出迎えがあったんですよ。それで生徒一同、町にずうっと並んで遺骨を先頭に肅々と進む行列を出迎えるんですよ。その並んでいるところに父親が自転車でやってきてね、「お前、合格してるぞ」って教えてくれてね(笑)。だからね、合格の印象よりもその出迎えの印象ですね。戦争ってひどいって気持ちがありましたね。それ以来もう教練なんてものすごい嫌いでしたよ。

高橋: 小学校と中学校はだいぶ違うんですか？

小暮: 違います。まず教練が始まった。私は昭和14年に入ったんだけど、翌年の15年っていうのは紀元2600年の記念日。ご存知ですかね？ それで大々的な催しがあった。

高橋: 皇紀というものですね。お祝いをするということですか？

小暮: そうですね。お祝いっていったってね、兵隊が来て訓練を見せるとかね、そんなんでだいたい軍国主義的なお祝いですよ。もう昭和15年と言ったら日中戦争が始まって、太平洋戦争の前年でしょう。

高橋: 中学生のとき、太平洋戦争が始まったわけですね。

小暮: 中学3年生。

高橋: 始まったときはどういう様子だったんですか？

小暮: 12月8日ね。あの頃学校に通うのにね、脚

絆っていうゲートル履くの。ゲートル巻いてる最中にね、家の中からラジオで「帝国陸海軍は戦争状態に入った」っていうのを聞いてね、「ああ、これは大変だなあ」って思った。

高橋: その頃はもう戦争はもう嫌なものだという？

小暮: うん、いやだと思ってた。教練は否応なしにやらされるしね、成績がいいとクラスの級長になるでしょ。級長になるとね、教練のときに中隊長とか小隊長になるわけ。それで3年生の3学期の時かな、学年全体の大隊長になっちゃったの。でね、高崎の連隊から大佐が来て視察をするんですよ。で、「前へ進めっ、右へならえっ」ってね、大佐にあいさつする。サーベルでこうやって仕切っていくわけ。それが嫌でねえ(笑)。でもやらされたもの。

高橋: 中隊長とか大隊長の方が、普通の人よりも大変なんですか？

小暮: 大変というか、普通の人は鉄砲担いでやるんだけど、まあ要するに目立つから嫌なんですよ。それからあの頃は中学に修学旅行なんてないんです。で、何があったかっていうとね、夜間行軍。鉄砲担いでね、10里ある遠い太田って街まで歩くの。真夜中に太田に着いてね、帰りもまた鉄砲担ぐ。重いんですよ、鉄砲。

浅井: おもりじゃなくて本物の鉄砲を担ぐんですか？

小暮: うん、三八銃。実弾を撃てるやつですよ。もちろん実弾は入ってないけどね。でも中学5年生の時かな、あのころ兵隊の体験をする必要があるのでね、高崎連隊に1週間泊まった。それから木更津の海軍の宿舎に1週間泊まった。それで陸軍と海軍の両方の訓練を受けた。それで陸軍の高崎連隊にいたときはね、三八銃で実弾訓練をやった。

高橋: 級長をされたということは、信頼があったわけですか。

小暮: そこそこでしょうね。級長ってのは1学期

2学期3学期、順番に1人ずつなるんです。だから私が3学期になったってのは、3番目ってことなの。

高橋: それはどうやって決めるんですか?

小暮: まあ一応選挙なんだけどね、成績がみんなだいたい分かってるの。1番成績がいい子は1学期に級長になる。2番目は2学期に、3番目は3学期(笑)。

高橋: じゃあクラスで3番目くらいだと。中学の頃も勉強は順調だったわけですか?

小暮: まあ一応ね。数学が一番好きだったんだけど、その次に好きだったのは歴史。中学3年生のときかな、東洋史の授業があったんです。それでその頃「物語東洋史」っていうね、こんな16冊もの全集が出た。昭和14、5年ですよ。それが読んで面白かったんだ。だから歴史の試験でね、満点を取ったのは私が初めてだとかいって歴史の先生に褒められた。

高橋: では数学も歴史もお得意で。

小暮: どっちかっていったらそのときは文科系に近いですね。小説もよく読んでましたね。

高橋: 「子供の科学」は中学生の時も読んでたんですか?

小暮: ずっと読んでました。

高橋: じゃあ、やっぱり本はたくさん読んでたんですね。お家で過ごされることが多かったんですか?

小暮: 中学に入ってからね。だからだんだん内向的になってきたのかなあ(笑)。

高橋: 理科は得意だったんですか?

小暮: うーん、化学はあんまり好きじゃなかったんだけど、5年生の時に桐生の工業専門学校から講師が来てね。有機化学の講義をしてくれたのが非常に面白かった。それで化学が好きになってね。で、父親が工業専門学校行けって言って、あの先生の下なら行ってもいいかなって思ってたんだけど。ただその頃ちょうど兄貴が医者になってね。大学出るとすぐ中尉になる、海軍中尉。かっ

こよかったんですよ。戦争は嫌いだけどね、兄貴の格好は良かった。で、大学出ると兵隊にならなくていいわけ。将校になれるの。だから大学生になりたい(笑)。

高橋: 将校ならなってもいいかなど?

小暮: まあしょうがないと思ってね。だって兵隊になるのは否応なしですからね。で、父親に「大学へ行きたい」と言った。そのために理由付けが要るんですよ。兄貴のそういう素晴らしい格好を見てたから、海軍の軍艦を造るということを口実にしたわけ。それで父親は、それならまあしょうがないかって。

高橋: それで大学に行くにはまず高校に。

小暮: 高等学校行かなきゃいかん。で、中学5年を終えて、東京の近くの旧制浦和高等学校の理科に入った。

●浦和高校時代

高橋: 高等学校は、どうやってお選びになったんですか?

小暮: どうってことないけど、東京の近くっていうことくらいですね。高校としてはまあ一高とか浦高、水戸高とかあったんだけど、何となく東京の街ってのはあんまり好きじゃないんで、まあ浦和ならいいやと思って。

高橋: 浦和高校もとても優秀な学校ですよ?

小暮: うん、まあ。

高橋: 受験勉強は大変だったんじゃないですか?

小暮: 中学3年生の時から受験勉強始めた。で、あのとき旺文社から「受験旬報」ってのが出てたんですよ。10日ごとにこんな厚い本が来るの。

高橋: 10日ごとにですか?

小暮: 旬報だから。それがあとで月刊の「蜚雪時代」になったの。で、中学3年の4月の頃、やっと大学に入れるという見通しがついたんで、受験勉強始めて。「受験旬報」ってのは模擬試験もあるんですよ。そういうやつに応募したりしてね。

高橋: 「受験旬報」は問題集みたいなものだった

んですか？

小暮：いや，解説書です．解説書だけ模擬試験だとかそういうのも入ってて，数学，英語，国語とかね．

高橋：中学が5年間で受験勉強を中学3年から始めるといのは，ちょっと早くはないですか？みんなそのくらいからだったんですか？

小暮：みんなもっと早いんじゃない．

高橋：そんな早くから準備するんですか．

小暮：高等学校は結構大変ですからね．

高橋：桐生中学では，高校に行く人はどれくらいいたんですか？

小暮：桐生中学からは150人の中で，4,5人ですかね．

高橋：浦和だけでなく旧制高校全体で？

小暮：旧制高校全体．

高橋：じゃあもう本当にトップレベルじゃないと高校には行けないと．

小暮：無理でしょうね．受験勉強した人の大半は，桐生工専か群馬師範か，そういうところを目指してた．

高橋：受験科目というのはやっぱり数学と物理とか．

小暮：あの頃ね，中学5年生の時に英語がなくなっちゃったんですよ．敵性国家語っていうんでね．それでね，試験に英語はなかったんじゃないかなあ．ずいぶん敵がい心を煽っているか，鬼畜米英って言ってたでしょう．

高橋：それで，試験はうまくいったわけですか．

小暮：まあ第1次試験は無事に通って，でも第2試験が問題で，体操があるんですよ．

高橋：体操もあるんですか？

小暮：逆立ちになって10歩あるけとかね．

高橋：ええ，そういうのをやるんですか．

小暮：そんなのできっこないんですよ．だいたい体操が嫌いなので．平行棒をちゃんと歩いてとか，そういうのがめっちゃくちゃだったからね（笑），これはもうだめかなあとと思ってた．

高橋：それでも受かったわけですよね．

小暮：まあなんとかね．でもだいぶ減点されたんでしょうね．

高橋：じゃあ普通の試験の方がとても良かったということですね．

小暮：で，通ったのかなあとと思って．でも一時はダメだと思った．

浅井：高校で理科と文科に分かれるんですよね？

小暮：理科は甲・乙ってあってね，甲は第一外国語が英語で理工系なの．で，乙っていうのはドイツ語が第一でね，将来お医者さんになるという人が対象だった．

高橋：先生はどちらだったんですか？

小暮：英語，甲です．それが昭和19年．ちょうど戦争が厳しくなった頃です．

高橋：高校は寮ですか？ 下宿ですか？

小暮：1年生はもう全員寮に決まってて，6つの寮に分かれてて，東一・東二，西一・西二とか．

高橋：先生はなんとという寮だったんですか？

小暮：東二寮ってあってね．学生は必ずどこかの運動部か文芸部のクラブに入らないといけないので，そのクラブごとに部屋割が決まるわけ．で，私は乗馬部に入った．

高橋：乗馬ですか．

小暮：ところが乗馬は嫌だったんです（笑）．

浅井：え，どうして乗馬を選ばれたんですか？

小暮：最初はね，自動車部に入りたかったの．

高橋：自動車部．へえ，そういうのがあったんですか．

小暮：うん．でもそこはダメだって言われて，それで乗馬部へ回されちゃった．いや，中学のときたまたま田舎へ勤労動員に出たらね，そこに馬場があって乗せてもらって面白かった．その程度の趣味なんだけど，趣味に乗馬って書いたら乗馬部に回されて．

それで乗馬部の部員は6人だったんです．で，2部屋あったのかな．部屋に入ると両側に分かれてて，1つが6畳になってて，6畳6畳で合間に押

入れがあって、その手前が空いてるんですよね。で、それに2人2人と上級生が1人ずつ、3人くらいで部屋に入る。

高橋:寮での生活っていうのは、どうだったんですか？

小暮:一番最初にびっくりしたのは、ストーム。ストームっていうのはご存じない？

高橋:なんか、お祭りみたいに騒ぐんですよね？

小暮:1年生だけ一部屋に集められるの。すると遠くの方から音がしてきてね、上級生が大声でなんか言ってるんですよ。で、それが部屋へ入ってきてね、すごい剣幕で1年生の前に立ちはだかって。でね、「高校とは何だと思う？」とか「学園とは何か？」とか聞くわけ。「なんでこの学校に入ってきたのか」、「この学校がいい学校だと聞いてたから」、「そんな嘘っぱちは言うなー！」なんて叱られるんですよ(笑)。そういうことをいっぱい言われるわけ。こっちは縮まってこうやってる(笑)。それをストームっていうの。

高橋:それは入学してすぐにあるわけですね？

小暮:すぐあるわけ。最初の半年くらいですけどね、そういうのがあったのは、「1年生集まれー！ストーム！」って大きな声が聞こえてくる(笑)。

高橋:で、昼間は乗馬をされるわけですか？

小暮:だけど戦争中ですからね、旧制高校でも自前の馬場なんて持ってないですよ。浦和市内に貸し馬場があって、馬が4,5頭いて、それを代わる代わるですよ。市井の馬場ってのは馬があんまりよくないですね。

高橋:それは授業が終わって放課後にやるんですか？

小暮:もちろんそうです。午後になると部活ですよ。部活を始める前に必ずマラソンがあるの。その日によって5キロ、10キロくらい。

高橋:毎日走らされるんですか？

小暮:毎日走るの。

高橋:じゃあ結構体力が付きますよね。

小暮:体力は付きましたね。

高橋:走ってから乗馬をするわけですか。

小暮:毎日行くほどの予算がないんですわ。だから馬場で本当の馬の実習をやるのは週に3日くらい。後はね、プールで水泳やったりね、他の運動やるんですわ。

高橋:じゃあ基本的には放課後はずっと運動をしているんですね。

小暮:ええ、なんかやってみましたね。

高橋:勉強の方はどうだったんですか？

小暮:まあだから相部屋でやるっていうんでね、私それも嫌いなんです。ほんと、1人でコツコツやりたいんでね、見られるの嫌なの。だからずいぶん嫌な感じでした。寮生活に馴染めなかった。

高橋:授業は難しいんですか？

小暮:うん、結構高等なものをやってみましたね。

高橋:当時の高校は今でいう大学教養レベルですよ。

小暮:うん。基本的なのはほとんど必修ですね。選択ってのはあんまりなかったんじゃないかな。音楽とか武道とか、そんなのは選択で、それでも剣術、剣道はやらされた。剣道がまたね、中学の時から1ぺんも試合で勝ったことがない。目が悪いせいもあるんだけどね。もちろん戦争中でも英語はちゃんとありましたよね。英語のほかにドイツ語もやりました。

高橋:授業についていくのは大変なんですか？

小暮:うん、まあかなり予習しておかないとだめなんだけど。学期末にね、成績一覧表が出るんですよ。それで成績の悪いものは赤い印が付くの。「あいつは赤丸だ」って。

高橋:先生はどうだったんですか？

小暮:幸い赤丸はそろわなかった(笑)。でも、あんまり上の方じゃなかった。それで最初の1年間、1週間くらいは田舎に勤労奉仕があったけど、まあ無事に終わったんですよ。次は昭和20年、この年はひどかったですよ。もう戦争末期で

ね。3月に東京大空襲、5月にも大空襲があって、そのときに母校の浦和高等学校も焼失した。

高橋: 5月の東京大空襲で浦和もやられたんですか。

小暮: そのとき私は寮にいたんですよ。B29が焼夷弾を浅草やなんかにいっぱい落としましたでしょ。10万人くらい死者が出たでしょ。で、その後北上してね、浦和で回転してサイパン島に戻るんですよ。そのときに残った焼夷弾をみんな落としちゃうの。だから浦和は大空襲受けてないんだけど、ぽつぽつぽつといっぱい被害があってね。それがね、浦和高等学校の図書館と、講堂と本館も全部焼けて、残ったのは理科の実験室くらいだよ。肝心なところは全部焼けちゃった。

浅井: じゃあ別に狙われてというわけじゃないんですか？

小暮: 全然。ぼん、ぼんって落としたのがたまたま。

高橋: 先生自身は危ない目にあわれたりとかはなかったんですか？

小暮: あってません。むしろね、講堂が焼けたでしょ。その講堂ってのは軍の物資の貯蔵庫だったの。講堂の中いっぱい、何が入ってたかというど米だとか粉ミルクとかね、それからカラメルとか、貴重な食料品がいっぱい。軍がひそかに隠してたの。講堂の外側は焼けたけど、そういうのはなかなか焼けないでしょ。だからみんなして取りに行った。

高橋: 2年生が始まってすぐ空襲にあったんですね。ではもう勉強どころではなくて？

小暮: そう。しかも工場通いでしょ。

高橋: 2年生から勤労働員ということですか。

小暮: 赤羽に勤労働員。浦和から赤羽に行って、赤羽から歩いて隅田川を渡って、それで軍事工場に通ったんですよ。圧延工場ってあってね、幅が20メートルで厚さが10センチもあるような鉄板があるんですよ。それを圧延で薄くする。薄くなったやつをくるくる巻き取るわけ。巻き取って

10センチくらいずつ刻み取って、それを1つずつ下へ落とす。で、所定のところまで転がしていくんです。重くて大変なんですよ。で、それがなんの材料かっていうとね、機関銃の部品なんです。夜も昼も続けてやってた。

高橋: それは毎日あるわけですか？

小暮: 毎日。

高橋: どのくらいの期間やられてたんですか？

小暮: 5月から8月までやってた。終戦の前の日までやってましたよ。で、6月の初めにね、その鉄の塊が私の両足に落ちてきた。それで親指がつぶれちゃったんですよ。すぐ消毒したんですけど、あの頃は消毒が十分じゃないんですよ。それで下宿へ帰ったら骨の方まで膿みだしてね。で、下宿先の大沢亀太郎さんっていう人がね、リアカーで遠い病院まで運んでくれた。それで切断せにゃいかんかと思ったけど、まあそれは治ったんだ。

高橋: 大変な目にあったんですね。では2年生の前半はもう全然勉強はなかったわけですか？

小暮: ないですね。

高橋: じゃあ本来の高校生の勉強よりはだいぶ少なかったのでは？

小暮: 少なかったですね。その代わり1年生ではかなり集中してましたよ。それから戦後の半年間もね。それで何とか取り戻した。それからね、1年生のときまだ19歳だったんだけど、徴兵検査が1年早くなったの。で、昭和19年に徴兵検査を受けたんですよ。そしたら、第1乙種合格。目が悪かったから甲種にはならなかった。でも無事に合格で。当時は理系には入営延期が認められていて、昭和20年になってから水戸の砲兵連隊へ入ることが決まりました。昭和20年の8月に入隊と決まった。

高橋: 実際に入隊をされて？

小暮: 入隊はしていません、予定。

高橋: 終戦で免れたということですか。

●終戦と青春

高橋: では終戦の頃はどんな様子でしたか?

小暮: 裏話があるんですよ。下宿先の大沢亀太郎さんは新聞記者だったんだけど、新聞記者クラブにはいろんなニュースが入ってくる。その頃、新聞屋は国威発揚のためにしか記事を書けなかったでしょう。それで7月27日に、日本がポツダム宣言を受けるんじゃないかっていうニュースが入ってきたんですけど、これは秘密なんです。日本は受けざるをえないんじゃないかって、そう大沢さんは言ってた。そういう状況にあった。

高橋: 玉音放送はどちらで?

小暮: あのねえ、終戦の前の前の日にね、13日かな、工場で徹夜の作業をしていたの。でね、夜中の12時に学生と職員が全部集められたの。それで工場長が、翌日14日の朝に東京に特殊爆弾が落とされるという情報が入ったって言うの。

高橋: 特殊爆弾ですか?

小暮: 特殊爆弾、広島。特殊爆弾って言ったんですよ。

高橋: 原爆についてはすでに聞いていたんですか?

小暮: 原爆はね、広島は原爆であるということば8月10日前後に、理研の研究者が来てくれてね、教えてくれた。はっきり覚えていないけれど、たぶん、仁科芳雄先生だったと思う。

高橋: そうなんですか。高校に説明に来てくれたんですか。

小暮: どうして来てくれたのか分からないんだけどね、とにかく講堂でその話を聞いた覚えがありますね。原爆の原理や効力などを含めてね。新聞では特殊爆弾といった。

高橋: 相当な被害だということも分かっていたんですか?

小暮: 分かっていた。だから工場長が非常に真剣に特殊爆弾が落とされる可能性があるって言うんで、工場はここで操業を打ち切ると。それで学徒

は直ちに帰れて。といっても真夜中ですからね、電車もないしそこで泊ったんです。で、14日に帰った。玉音放送は15日の正午にあったでしょ。でも全然聞き取れない。ラジオも上等じゃなかったしね。

高橋: 下宿で聞かれたんですか?

小暮: 下宿で聞いたんですよ。そしたらさっき申しましたように大沢さんって方が新聞記者だったでしょ。玉音放送の内容はだいたい分かった。大沢さんは「これはもう日本が負けたってしるですよ」と断言してくれた。そのときはうれしかった。すごくうれしかった。

高橋: そうなんですか。

小暮: だって8月に入営する予定だったんだもの。

高橋: ああ、そうですね。それを免れて。

小暮: おまけに毎日毎日灯火管制でしょう。夜は真っ暗にしなきゃならんでやっど本読むくらいでしょ。で、勤労働員が続くでしょ。怪我するでしょ。良いこと一つもない。そういうときに終戦になった。こんなうれしいことはない。

高橋: だいぶ解放された感じですか?

小暮: もうほんっとに解放感があってね。友達誘って町の中をマント着て闊歩したよ。そしてアメリカのグラマンがこう飛んでくるでしょう。でももう平気ですよ。前はグラマンが来たら機銃掃射でうっかりしたらやられちゃいますからね。

高橋: もうそんな心配はないと。

小暮: そうですね。まあだいたい学生の多くは涙流したり悲しんだりっていうのはなかったですよ。どっちかっていったら喜んでた。だから8月ってずいぶん解放感があった。

でね、私は乗馬部の友達とね、哲学者の柳田謙十郎って方ご存じないかな、西田哲学なんだけど、その人が浦和高校の哲学の先生だったんですよ。その柳田先生の自宅を訪ねたの。戦争は終わったけど今後はどうなるでしょうかっていろいろ話を伺った。そのときの柳田先生の話は、とに

かく日本はこれだけ焦土になったし、もういっぺん土に戻りなさいと。全く新しく一步を踏み出さないといかんのだと。そういう気持ちで9月からやりましょうと。そういう話をされて。

高橋: 柳田謙十郎は有名な哲学者ですね。浦和高校で教えていたんですか。

小暮: 高校の哲学の先生だった。西田哲学だからね、この人の話は難しいんですよ。でも人柄は非常に良かったしね、話は分からないんだけどまあ聞いてた。で、後から聞いたんだけど柳田先生は警察の要注意人物だったみたい、思想的に。講義では西田哲学に徹しててね、戦争の話とか軍国的な話は一切しなかった。誰も学生はそれに異を唱えない。他の先生方からもね、戦争を煽るような話は聞いたことないですよ。中学の頃はそういう話をいっぱい聞いたけどね。高等学校ではあんまりそういう話、聞いた覚えがないなあ。

高橋: じゃあ高校は自由な雰囲気ですか？

小暮: はい、特に教練が良かった。我々の教官はお年寄りの渡辺三次さんっていう陸軍准尉なんだけど、彼は我々をクヌギ林へ連れて行くんですよ。武蔵野ですから、あの頃まだクヌギがいっぱい残ってた。でね、「銃を立て」って銃を3本立てるでしょ。生徒は並ぶでしょ。で、しばらく解散。1時間解散してくれる。こんないい教練ないですよ(笑)。

高橋: それはいいですね。

小暮: で、軍から派遣されてる配属将校は滝大佐っていう大佐なんだけどね、僕らは軍を信用してないの。滝さんってのをたちまち冷やかしちゃって、こういうのを作ったの。下から読んでも上から読んでも同じって文章でね、「マント着た、浦和で笑う、滝とんま」って。「マントキタウラワデワラウ タキトンマ」(笑)。

高橋: へー、ちゃんと回文になってるんですね。それを高校生が作ったわけですか？

小暮: 作った。高校生って偉いんですよ。頭がいいんだなあ。さっき言った渡辺三次さんって准尉

に対してもそういうのがある。「断然三ちゃん、家賃三銭だ」、「ダンゼンサンチャン ヤチンサンセンダ」。なかなかこんな作れないでしょ。そういう雰囲気だった、僕らの高校時代って。

高橋: 面白いですね。戦時中にもそういうユーモアがあって。

小暮: 自由だった。

高橋: それで終戦で、また授業が始まったわけですか。

小暮: 8月15日に終戦で、9月から学校が再開しました。

高橋: 高等学校は本来3年間だと思いますが、先生のときは短縮で2年ですか？

小暮: ええとねえ、入学したときは短縮で、2年間で卒業のはずだった。終戦の翌年に卒業予定だったんです。ところが海軍兵学校と陸軍士官学校の卒業生が出てきて、その人たちを大学に入れないといけないうわけ。そのときの文部大臣が、天野貞祐っていう哲学者ですよ。その人の英断で旧制高校は3年に延ばすと。で、陸士と海兵を出た人に大学入試資格を与えた。正月になって早々にね、「お前たちは3月に卒業するな、1年延びた」と。でももともと2年の予定だったから、一応全部単位は取ってある。それで新しい学科をいくつか用意したから、自由に過ごせと。

高橋: そのときはどう思われたんですか？

小暮: うれしかった。

高橋: もう1年また高校生活ができるということですか？

小暮: 私の人生でね、あの年ほど青春を楽しんだ時代はないですよ。戦争中だと映画を見ることもできないし、音楽会にも行けなんでしょう。全く自由でね、だから毎週のようにお茶の水あたりに行ってね、映画を見たりそういう時間がたっぷりあった。あの頃、なんか変な小屋みたいなもんだけど、古いフランス映画を持って来たりドイツ映画を持って来たりね。だからその時にフランス映画、ドイツ映画をずいぶん観ました。

高橋: そんな終戦後すぐに外国の映画をやるんですね。

小暮: 終戦の翌年ですけどね、そこにはもう学生がいっぱい来ていた。

高橋: では、3年生を1年間ゆっくり楽しんで。

小暮: 楽しんだ(笑)。それで昭和22年の3月に卒業した。

高橋: 次は大学ですね。

小暮: さっき申しました通り、もともと父親は中学出たら地元的高等専門学校に行けって言うんですよ。でも私の兄が軍医でね、海軍中尉でものすごい格好良かったの。だから大学行きたいって思ったわけ。それで大学の工学部に行って将来船を作ってって口実をつけてね、嘘ですよ(笑)。で、まあ船作るんならしょうがないって言って、浦和高校入学を許してくれたんです。だから工学部を目指してたわけなんだけど、戦争も終わったしね、工学部なんて嫌になっちゃったの。だけど何をしたらいいか分からなかった。

それでたまたま本屋に行ったとき、昭和19年だから終戦前ですけど、新刊書が出てね、本の名前が「天体の輻射と電離」¹⁾ってものの。編集は荒木俊馬。

高橋: 当時の京大宇宙物理の教授ですね。

小暮: 初版が昭和19年12月。出たばかりで、そのときたまたまその本を買っておいたの。中身は電離論とかね、京大で1930年代40年代にやっていた研究の論文集だった。

高橋: 論文集なんですか。ではだいぶ難しいのではないですか。

小暮: 専門的で、全然分かんないんですよ。だけどその本に引っ掛かりがあってね、昭和21年、青春を謳歌した時期にあらためて読んでみたらなかなか面白そうだというんで、それで宇宙物理学教室っていう名前をその時に知った。まあ今までだいたい物理とか数学が好きだったし、やっぱり歴史より理数系の方が面白くなってきてた。それじゃあ京都の宇宙物理を受験しようかなと思っ

て。で、父親に「京都行きたい」って言ったら、「そんな遠くへはやれない、東京行け」って言ったの。私、東京ってあんまり好きじゃないの。もう焼けちゃったしね。それに関東より京都の方がやっぱり歴史があるし、そういう日本の古い歴史にも大いに興味があった。だから京都に行きたいと最初から思ってた。それで「宇宙物理って京都しかないんだ」って頑張ったわけ(笑)。それでやっと許可がでてね。

高橋: 東大や東北大は天文学科ですからね。それで京大を選んだわけですね。

(第2回に続く)

謝辞: 本活動は天文学振興財団からの助成を受けています。

参考文献

- 1) 新城博士記念宇宙物理学研究会, 1944 (昭和19年), 宇宙物理学論叢 天体の輻射と電離 (恒星社厚生閣)

A Long Interview with Prof. Tomokazu Kogure [1]

Keitaro TAKAHASHI

Faculty of Advanced Science and Technology,
Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami,
Kumamoto 860-8555, Japan

Abstract: This is the first article of the series of a long interview with Prof. Tomokazu Kogure. He started his study on Be stars under the supervision of Shotaro Miyamoto at Kyoto University. He served as the Chair of Group of Optical Astronomers in 1980's and promoted the construction of large optical telescope (Subaru). In this article, he talks about his childhood and school days during the World War II.